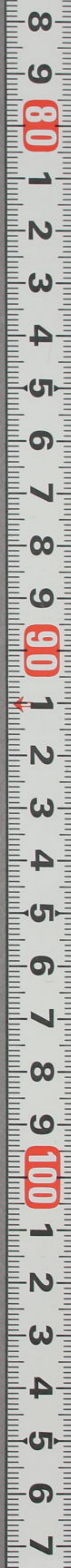


玄同放言

卷一上

15
1212
1



15
1212
1-6
1812
1

簞笠瀧澤翁隨筆



玄同放言

東都書肆 文溪堂梓

玄同放言叙

近有一儒生題三聖嘗醋圖

曰瞿曇氏云眼耳鼻舌心意

皆空舌空則何得能辨其味

老聃氏云五味使人口爽口

爽則何得能辨其味孔夫子

仙鶴堂梓
庚子年
二月

602

云心不在焉食不知其味吾
夫子心在焉是以獨得能辨
其味此言雖出乎戲亦諍訟
之所起也諍訟三教之徒也
若使三聖同時出世而相遇
則目擊道存相笑不言也其

不辨彼此不論是非通而一
之是謂玄同此儒生惡知玄
同之義一日簞笠翁携其所
著玄同放言來而徵序於余
余未及啟其帙先舉前言質
問其義翁對曰先生之言老

○二
聃所謂和光同塵之義吾豈
敢哉昔東坡作汨突羹余效
之別製一羹魚肉蔬菜甘脆
苦澁悉聚之和羹中雜煮而
具於膳羞私名之曰玄同羹
今余所輯書亦猶是羹也五

十年來耳目所經隨聞隨見
而隨錄之古今異同賢否精
麤彼此是非自他深淺雜掇
而論之但其味褻矣奚足羞
於朝夕嘗三斲七醢之人乎
先生幸下一匙而賜品賞焉

鳥藏書

余聞其言領謝之乃染指於
鼎遂次是言以代序之人也
文政元年戊寅六月吳文遠
蘇如出吳鵬齋老人興撰
西齋繪之古今
十年春何自西齋鵬齋問其



玄同放言の書を編む崖畧

以の書の才ある人書後と考へ考へ考へ撰ありて也。此後
世は貽とせし。慈善のありていんや。志のこゝろ博と博とを撰
その考へたるの法或は博と考へる志ありたり。その才あるは
此の文の(一)を(二)と考へる。或は(一)の才ありたり。或は
ハナハナを(二)と考へる。道は志薄のありて也。玉觴堂の如し。鳴
文華を(二)と考へる。道は志薄のありて也。玉觴堂の如し。鳴
あゝ化るる。あゝ化るる。近属隨筆乃多。卷は百八十あり。天野氏の臨
尻ハその考へる。數百は及びたり。世は(一)の考へる。百卷ハ足ら
白石翁の隨筆ハ大約一百三十餘部。卷ハ二百八十あり。卷數定の
ち(一)の考へる。二十三部あり。その書目は(一)の考へる。人
左(一)の考へる。三十部あり。過(一)の考へる。唐山の宋の時洪邁の五筆を
多。卷は(一)の考へる。我(一)の考へる。比(一)の考へる。九年と一續あり。次

玄同放言卷一上

○崖畧

仙鶴堂梓

玄同放言總目錄

○卷一上 天部

第壹 蛭兒進雄ヒルコスサノヲ

第三 嗚呼物語ウハコト

卷一下 地部

第五 名手莊大塔御領

第七 秋田嶋沼並圖

第九 富士歌等類龍華寺庭前望嶽圖附

第十一 武藏太田莊

第十三 追加龍華寺全圖並江戸古圖略說追考

○卷二 植物部

第十四 飛驒三枝トウゴウ

第二 星隕如雨オホシノ

第四 雷魚雷鷄雷鳥並異形雷獸圖

第六 外濱並湖沙

第八 伊豆韭山ニラ

第十 江戸古圖略說

第十二 町坊舍

第十三 町坊舍

第十五 塩草シホ附考餘

第十六 正月門松ムツキ

第十八 山牡丹山橘附

第二十 草木身體同訓考

同卷 人事部一

第廿一 人主好瑞ミコトノヨシ

第廿三 老佛老和尚

第廿五 漢火生剋應驗辨

第廿七 時賴微行

○卷三 人事部二

第廿九 姓名稱謂

第三十 久米仙吉野山賽仙附

第三十三 尼妙圓妙圓石地藏圖附

第十七 三浦平松國崎天道松附

第十九 人參和名考並詩歌

第廿二 四謚四德

第廿四 文武剛臆坐

第廿六 景清一目兩勇並偽目附

第廿八 祭父祖雙言禍福善相公尺牘評並作字正論附

第三十 宋陳彭年綽號

第三十三 壽算

第三十四 藤原經房

第三十五 小松内大臣 平、勳、衛

第三十七 渡江達磨 和漢智戰

第三十九 藏法師

第四十一 詰金聖歎 水滸傳像贊 二頁附

卷四 器用部

第十三 刀緒

第十五 十文錢並四出文錢 物價附

第十七 朱子自贊肖像 朱凌附

第十九 渾不似圖說

第二十一 白袴 踏皮並食籠 考餘附

第二十三 埴輪圖考 地藏形附

第二十五 筆塚 高道並 墓碣附 在忠

第三十六 狄青錢卜

第三十八 仁和寺兒法師

第四十 白幽子異傳

第四十二 酒顛童子

第四十四 爲朝朝臣征箭並圖

第四十六 關羽書辨疑 閔帝籤 應驗附

第四十八 蜘蛛手形辨 百果月餅附

第五十 舶名號 高瀨平馱 独底船附

第五十二 兩山富士銅堂古鏡 並山中 圖

第五十四 楮錢冥衣並圖

第五十六 土中出現白屋 並家 具圖

卷五 動物部

第五十七 九足馬 名馬附

第五十九 象並觀象圖

第六十一 宇具比壽

第六十三 鷓鴣考異

第六十五 入内雀

第六十七 雪蟬 左加別通 並圖

第六十九 左登里魚並圖

卷六 雜部

第七十一 折骨

第七十三 頭魚宴

第七十五 守庚申並態進

第五十八 異牛 越後、關牛附 並圖

第六十 狗 狗妖並人狗附

第六十二 杜鵑考異

第六十四 佛法僧 慈悲心鳥 並圖

第六十六 鬪鷄

第六十八 越海獸 二種 並圖

第七十 奧羽波多々魚並圖

第七十二 擎傘去寺

第七十四 髭鬚 赤坂奴 附

第七十六 士替禮 風地觀 附

玄同放言卷一上 ○題目

仙鶴堂梓

第十七 格言

第十七九 獅子舞

第十八 痘瘡麻疹考餘 モカサ アカモカサ 福来病並 洗眼方附

第十八三 白眉神 附道念

第十八五 昨非獨斷

全部六卷

附錄並圖說共二十六條

寫字三本

第十七八 猿樂田樂

第十八〇 兩子寺

第十八三 世繼稻荷

第十八五 童話考餘

通計八十五篇

畫圖二十八種

玄同放言總目錄終

上集引用書目錄

書紀

偽撰日本後紀

文德實錄

日本紀略

大鏡

新撰姓氏錄

天滿宮託宣記

江談

奧州後三年記

平家物語

東鑑

參考太平記

臥雲日件錄

南朝武臣傳

皇統授受圖

日本紀竟宴和歌

古今六帖

古事記

續日本紀

三代實錄

扶桑略記

增鏡

諸家大系圖

梅成錄

古事談

參考保元物語

長門本平家物語

義經記

梅松論

南朝記傳

花咲松

萬葉集

神樂催馬樂歌

堀河百首

缺本日本後紀

續日本後紀

類聚國史

水鏡

令義解

菅家御傳記

日本靈異記

十訓鈔

參考平治物語

源平盛衰記

太平記

吉野拾遺

櫻雲記

讀史餘論

萬葉集略解

古今集

詞花集

林葉集
 山家集
 新葉集
 為尹卿千首
 春兩鈔
 本朝文粹
 本草和名
 和訓類林
 源氏物語
 和漢三才圖會
 大和本草
 信濃地名考
 大東國郡分界圖
 長亨江戶繪圖
 琉球事略
 出羽大沼浮島圖
 秉燭譚
 駿臺雜話
 新古今集
 拾玉集
 李花集
 夫木鈔
 井空集
 本朝無題詩
 和名類聚鈔
 和訓栞
 枕草紙
 春曙鈔
 俗說辨
 髯人參種植法
 甲斐名勝志
 鎌倉志
 慶長江戶圖考
 琉球談
 紹述文集
 南留別志
 武者物語
 新撰六帖
 新拾遺集
 雲葉集
 深秘鈔
 匠材集
 狂雲集
 拾芥鈔
 宇通保物語
 小世繼物語
 本朝食鑑
 神農本草經解故
 增補越後名寄
 長祿江戶繪圖
 寬永版江戶繪圖
 諸國里人談
 輜軒小錄
 塩尻
 靜齋隨筆

煙霞綺談
 東遊記
 橘品論
 類柑子
 山海名產圖會
 書經蔡沈集傳
 易緯
 孟子
 國語
 後漢書
 梁書
 宋元通鑑
 爾雅注疏
 字彙
 山海經
 荀子
 抱朴子
 風俗通
 雷震記
 牡丹論談
 物見車
 八文筆記
 牽牛品
 周易程朱專義
 周禮注疏
 中庸
 史記
 三國志
 明史
 十八史略
 說文
 續字彙補
 老子
 呂氏春秋
 搜神記
 劉向新序
 朱紫
 百椿譜
 犢牛
 閑田次筆
 牽牛通
 詩經朱熹集傳
 論語朱注
 春秋左氏傳
 漢書
 張拭諸葛忠武侯傳
 通鑑綱目
 十九史略
 正字通
 文獻通考
 莊子
 淮南鴻烈解
 白虎通
 王充論衡

玄同放言卷一上

○引書目

仙鶴堂梓

歲脚猶不立故乘之於天磐椽樟船而順風放棄論語
 陽一貨孔子曰子生三年然後免父母之懷三歲也立
 篇如必厄弱不具あるを以て爲政篇又云譬如北辰居其所而衆
 星共之註朱子曰北辰北極天之樞也居其所不動也
 北極の人中して足立るもの如く又天磐椽樟船に乗せし順風放棄といふ
 易の三坎と水と北と爲事文類聚前集三五曆紀云星水之
 精也といふを攷据とすべし古事記の鳥之石楠船神をえり樟も楠も船
 造るは勝るもの石の水性の堅れを以て鳥の鷓首を以てあるべし本草綱目木之
 樟集解陳藏器曰江東舸船多用樟木縣名豫章因木得
 名又楠集解寇宗奭曰江南造船皆用之其木性堅而善
 居水といへも天磐椽樟船への樟字を假借し鳥之石楠船神への楠字を
 配當る記者の用心亦思ふべしかくて日の神と天下の主と天子一人の

爵稱猶天從後大也人の世となりてハ天皇と稱奉る今義解儀制
紀所稱天皇詔書所稱皇帝華夷所稱陛下上表所稱
太上天皇讓位所稱帝乘輿服御所稱車駕行幸所稱皇の君との徳
 天つ日の如く皇太子及皇臣まへと唱へ皇女皇后及皇臣
 妻子とまへく日女と唱へ例せば書紀神代天津彦彦火瓊杵尊とあるを
 古事記の天津日高日子番能命と藝命と作す天稚彦を天若日子と書
 ぶが如く加以古事記の甕主日子神阿遲志貴高日子根神日子穗
 穗手見命等共見上巻に於て日子と彦と書るは稀彦日子の假字
 ならばあまの古事記を正しとすべし又書紀神武日臣命ありひる子日臣
 並に臣子の義あり後世に至る彦及姫との書とも罕め古義の存
 在あり續紀高野天多可連淨日女あり天平神護二年十二月戊申叙位云
 又光仁紀安曇宿禰日女虫あり天應元年二月壬辰授從六位
 わるべし異朝の制度も亦ことと相似り尚書洪範曰天子作民父母

之精也。その萬物の精あり故に山川草木化生く。後四象の神も化生
ありといふ理よく合へる。この段ハ古事記を考へてハ素盞鳴を房雄の義とせん。
亦ありぬ。あはれり。こは神化生くありといふ。有勇悍以安忍且常
以哭泣為行といへる。かゝる辰の震動あり。進雄くは義中も
稱へる。陽ハ聲を發し陰ハ穀なり。飛鳥混虫み如く。故に斑固
曰。白虎論。喜在西方怒在東方。又曰。東方物之生。故怒と
いへる。亦是彼神化生ありといふ。常以哭泣為行といふ。かゝる書紀一書
説中を神素盞鳴尊とし。或ハ速素盞鳴尊とを古事記ハ建速須左之
男命とを神ハ神速建ハ勇悍速ハ勁捷の義。彼漢人の東方房辰を民の
田時と。季春ハ陽氣動。雷電振。草木怒生といふ。合へる。書紀ハ日
神と素盞鳴尊と。かゝる御田頃ハ播種志あり。こゝも右引
と。この文を照く考へ。同書ハ素盞鳴尊結東青草。以為笠蓑

乞宿於衆神といふこと見えり。あを書紀一書の説。宿ハ星のやうに。又
止宿の義と。宋永亨搜採異聞録二卷云。二十八宿宿音秀。若
考其義。則止當讀如本義。若記前人有説如此。説苑辨物
篇曰。天之五星。運氣於五行。所謂宿者。日月五星之所宿
也。其義照然。然この書全四卷。凡四十。又五雜組部。星宿の宿音夙。夙ハ
やと。今按さる。史記天官書ハ房為天府といへる。亦是止宿ハ義
あり。かれば或ハ播種。或ハ乞宿の辰の神の所行をかへる。將角氏尤
房心箕尾の七星ハ東方の星あり。大心と。心ハ東方ハ星といへる。辰
巳ハ位せらる。と得。辰巳ハ龍蛇あり。八岐大蛇の身亦あり。故に
史記天官書曰。大星天王也。前後星子屬索隱曰。洪範五行
傳曰。心之大星。天王也。前星太子。後星庶子。心星ハ兩星
あり。大蛇ハ八岐の頭尾あり。二ハ偶の首ハ偶の尾なり。二二と四と。二四ハ

玄同放言卷一上 ○進雄 仙鶴堂梓

八と云ふは義是也。太史公曰。大星不微直直中星微也。明直則直也。天王即天心失計。房為府。天駟其陰。右驂菊有兩星。曰。衿北。一星曰。牽。大蛇の段もくもく。の文義は合へ。八岐大蛇が斬られ。の心は。大星が計を失せ。ゆゆは。是欤。かくて。その尾頭より。天叢雲の劍出。ハ。彼天王と太子ハ亡て。その廢子が繼く。似たり。又房の旁。兩星。衿ハ奇稻田姫牽ハ。おん子大己貴神。よ。そを。い。め。也。正義引星經曰。鍵閉。一星在房。東。北。掌管籥也。といへ。籥籥通。大己貴神且く天下を管領。い。い。り。り。合へ。亦日の神と素盞鳴尊と。おん中。い。い。り。り。亦史の天官書。火犯守角。則有戰。房心王者惡之。と。い。い。り。り。曾氏十八史略。宋紀仁宗曰。真宗得皇子。已晚。始生。晝夜啼不止。有道人言。能止兒啼。召入。則曰。莫叫。莫叫。何似當初。莫笑。啼即止。蓋謂真宗嘗額上帝。祈嗣。問群仙。誰當往。

者皆不應。獨赤脚大仙一笑。遂命降為真宗。子在宮中。好赤脚。其驗也。といへ。こ。こ。小説は。保。い。い。も。素盞鳴尊生。常。哭。泣。い。い。粗。相。似。り。この他。ほ。和漢の書を引。つ。け。と。く。べ。た。す。な。れ。あ。わ。ね。ど。餘。に。細。か。ん。い。い。も。か。と。抑。諾。冊。兩。尊。日。の。神。月。の。神。と。生。次。星。と。辰。の。神。と。生。あ。ひ。つ。於。是。日。月。星。辰。の。四。象。の。神。と。化。生。あ。ひ。れ。易。繫。辭。曰。大。極。生。兩。儀。兩。儀。生。四。象。と。い。是。れ。と。い。い。り。抑。こ。の。一。編。へ。り。來。秘。藏。の。説。れ。れ。目。と。賤。多。か。也。又。世。の。夷。の。神。ハ。蛭。子。ら。彦。火。出。見。尊。あ。り。先。板。京。雜。記。に。い。か。て。今。茲。こ。の。一。卷。を。創。し。あ。の。世。の。あ。り。る。物。又。と。い。い。り。い。い。り。火。出。見。尊。の。一。條。を。考。考。と。い。

第二天象

星隕如雨

噫世の文場は遊ぶもの。星隕如雨といふ。た。た。を。と。く。左。傳。を。引。び。り。た。し。あ。い。も。國。史。の。こ。の。あ。り。り。の。稀。と。い。い。り。家。の。財。を。と。り。鄰。の。

室を數るに似たり。今本文を抄録して幼學の爲に書紀天武
 日十二年即チ白鳳十二年也。本書不掲年號。大國史
 庚午日没時星隕東方大如瓮神龜元年十月詔爲證。十月
 隕如雨續紀仁曰寶龜三年十二月己未大國史作十月
 星隕如雨三代實錄陽成曰元慶八年八月四日壬辰自
 戌至子小星四方流散行隕墜如雨印本隕作墜。蓋傳寫
 也地志を魯史を考る。春秋の莊公の七年あり。經曰夏四月
 辛卯恒星不見夜中星隕如雨左傳曰星隕如雨與雨偕
 也杜註曰如而也夜半乃有雲星落且雨其數多皆記異
 也日光不見恒星不見而云夜中以水漏知之今こまに因る
 とは雨と俱に降る星之愚竊疑之流星ハ雲なれば夜多かり經は書
 所恒星不見と云ふは是と異といふは恐らく雨と俱あるゆ

あらゆる解や惑ひぬ書紀ゆ天文悉乱と書し實錄ハ小星四方流
 散行云云といへるがれこの夜雨の如く一天雲なれば推して知るべしと文
 おく左傳は扱らぬ又杜註を取らぬ隕る星の多かり雨の如と書さ
 經の文を國史をよぼし國史の文を經の誼を味へ左氏が傳疑はく杜預が註
 評するに似たり昔儒謂左氏是非謬于聖人愚も亦るに疑ひ多かりを得るに
 草木子管燒曰星自天横飛而過則爲流自下復上則爲
 奔自上下而下則爲隕又曰星隕精氣竭也川竭川脉絶也
 又曰列星爲象也在朝象官在人象事在野象物各因其
 象占焉あやよく星變の趣を得る又國史に見る所流奔隕星の外に
 星あり類聚國史弘仁二年八月甲戌幸神泉苑是夜有二
 星乍合乍離狀似相鬪是夜以紀畧今按呂氏春秋明理曰其
 星云云有鬪星有賓星其氣有上不屬天下不屬地これ

天ノ星あると地ノ石あるが如し。星隕おち石おちありといへる。左傳僖公六年隕石于宋五隕星也。是より以降史傳見れるいと夥あまあり。小贅せい國史の續紀光仁寶龜三年六月戊辰往隕石於京師其大如柚數日乃止又寶龜四年五月辛丑有星隕南北石一其大如瓮石印本一作名一本又寶龜七年九月云是月每夜瓦石及塊自落内豎曹司及京中往屋上明而視之其物見在經二十餘日乃止る落星石ありありて俗よ天狗の類なりなり。又續日本後紀八兼和六年冬十月乙丑出羽國言去八月廿九日管田川郡司解解此郡西濱達府之程五十餘里本自無石而後月三日霖雨無止雷電鬪聲經十餘日乃見晴天時向海畔自然隕石其數不少或似鏃或似鋒或白或黑或青赤九厥壯體銳皆向

西莖則向東詢于故老所未曾見國司商量此濱沙地而徑寸之石自古無有仍上言者其所進上兵家之石數十枚収之外記局勅曰云云又三代實錄陽成元慶八年九月廿九日丙戌出羽國司言今年六月二十六日秋田城雷兩晦冥雨石鏃二十三枚七月二日飽海郡海濱雨石似鏃其鋒皆向南陰陽寮占云國之憂應在兵賊疾疫記されども鏃石といふのハ唯與羽のなり越後佐渡今かほあり余も西三枚藏り俗ハ神軍の矢根とのあり也雷斧の類ありべし又東鑑寛喜二年八月八日記曰大進僧都觀基參御所申云去月十六日夜半陸奥國芝田郡石如雨下件石一進將軍家頼經大如柚細長也有廢石下二十餘里云云彼寶龜三年六月の隕石と形相似り落星石ありべし又史記

書。官星墜至地則石也。と云條の正義曰。今吳郡西鄉有落
 星石。其石天下多有也。といへ。皇國亦以之あり。里人談部
 載。信濃國岩村田の邊有星糞石是あり。土民春田と鋤畑をうつ比
 件の石を掘出せしむ。彼地の流星常多かり。流星を見る明春を
 此石の出る事も多かり。土人これを星糞石と呼ぶといへ。天の四象の地
 水火の如く象ありて形あり。譬バ星の石はあまも地は墜くちりて形あり
 理或然るといへん。死人の魄もさうは類也。落く地は入ると死ハ雪花菜に
 似たり。九經死せしもの魄ハ必き土中に入らる。をやく掘ると死ハ魄あり
 星石の變化も亦かくの如くあり。星ハ精なり。精神を魂魄と云。故ハ類經
 卷本神篇類注張介賓云。蓋精之爲物重濁有質形體因
 之而成也。魄之爲用能動能作痛癢由此而覺也。といへ。魄ハ
 蘭學者流の所云神經之象之。于天地天氣爲魂地氣爲

魄。魂者神也。陽也。氣也。魄者精也。陰也。形也。又佛説ハ魂識
 魄識あり。同一理あり。天之魂魄曰。日月星辰。地之魂魄曰。風雲
 水火。日ハ天之魂なる故。夜ハ見ると得。猶動物寢て就ハ魂を此
 位を離して。自他を去る。如し。月ハ天之魄なる也。望ハ魄を得。猶
 猶物の生中を此魄生て。死ハその魄滅る。如し。古人月の晦望ハ魄を以
 り。誠ハ所以あり。隕星の變化も。此理を推さバ曉易なるべし。

第三天象 嗚呼物語

天を測る。天を究む。これを測る。これを表の。天をいふ。天を
 天を辨む。これをいふ。理の。有。死理。有。奇。て
 ほえぬ。も説く。の。釋氏の天堂。道家の玉城。を此言を。奇。て
 その。實を。唯老佛の。儒。天の高。と。里と。以
 め。非。と。天を氣の積る。と。不易の論と

以とも亦推量の外を出で、只見る事よ説りのハ子思の昭々中庸、莊子ハ
蒼々道遠視聽の及びかたため、智あつといふとも得るぬあるべし。天ハ誠ニ昭々
るや、將蒼々るや、その高、遠して至極むるより、かたといふせん、視れども
これを見ざるが如く、聽どもいふで聞ざる如く、然るをえく来もあるがごとく、そ
里數を定むといふを、人あつりの所為あるべし。その里數中も異同あり、大くハ
九萬里と、或ハ十九萬三千五百里と、或ハ萬五千里と、或ハ五億萬里と、
或ハ七萬八千九百四十里と、佛説ハ十萬億土といへり。辨あり、三教のこの他、かた
條はあつる
へ、勞七功多と、かたハ許多の書とあり、移るを改撰らむ管見のま、左ニ録す
拾芥抄上、天、高、七萬八千九百四十里、地、厚、五萬九千四
十九里、○莊子逍遙遊大鵬、搏扶搖而上者九萬里、九万
里ハ天地相去るの里數上るの限り、○爾雅天、測滿疏載鄭注考
靈耀曰、天圓周之里數百十萬一千里、直徑三十五萬七

千里、二十八宿之外、上下東西各萬五千里、四表之内、并
星宿之内、總三十八萬七千里、天中央、上下正半之處、一
十九萬三千五百里在、於中、此ハ地相去之里數也、又曰、
地厚三萬里、春分之時、地當正中、自此地漸く而下、至夏
至之時、地下漸く而向、下至秋分、地正當天之中央、自此
漸く而上、至冬至、上遊萬五千里、以上考靈耀の文、月令正義考靈耀ハ
周禮の疏、その他諸書より引く、この書傳ハ
○周禮天官、曰、日至之景、尺有五寸、謂之地中、天地之所
合也、四時云云、註景、尺有五寸者、南戴日、下萬五千里也、
地與星辰、四遊升降于三萬里之中、是以半之得地之中
也、○劉向新序刺奢、曰、魏王將起中天臺、令曰、敢諫者死、
許綰負操鋪入曰、云云、臣聞天與地相去萬五千里、今王
半之、當七千里之臺、高既如是、其趾須方八千里、盡王之

玄同放言卷一上
〇天之里數
仙鶴堂梓

地不足以為趾。淮南子天文訓曰：天有九野，九千九百九十九隅，去地五億萬里。又曰：日入于虞淵之汜，凡曙於蒙谷之浦，行九州七舍，五億萬七千三百九里。〇白虎通日月曰：周天三百六十五度，四分之一，日月徑千里也。〇五雜俎天部謝肇淛曰：天去地九萬里，徑三十五萬七千里，此亦臆度之詞耳。天之體，日月星辰所不能周也，而況於人乎。〇草木子管窺篇葉子奇曰：空即天也，自地而上，莫非空也。即天也，此漢獨以其實得之，以下係于三教。〇神道八日尊儒道，天を貴ぶ釋教も亦日を本尊とせざることをか。三教その道異ふも理一致あり，何を以て釋氏も亦日を尊ぶよとを考や。釋氏ハ阿彌陀を師表とせしを阿彌陀ハ即大日なり。佛說阿彌陀經曰：尔時佛告舍利弗，後是西方十萬億佛土，有世界號

極樂，其土有佛，號阿彌陀，舍利弗於汝意云：何彼佛，何故號阿彌陀，舍利弗，彼佛光明無量，照十方國，無所障礙，是乃十方國を照し，障礙ありの天日ありと何ぞや。又曰：東方世界亦有阿閼鞞佛，須彌相佛，大須彌佛，妙音佛，如是等恒河沙數諸佛。又曰：南方世界有日月燈佛，名聞光佛，大焰肩佛，須彌燈佛，無量精進佛，如是等恒河沙數諸佛。又曰：西方世界有無量壽佛，無量相佛，無量幢佛，大光佛，寶相佛，淨光佛，如是等恒河沙數諸佛。又曰：北方世界有焰肩佛，最勝音佛，難姐佛，日生佛，網明佛，如是等恒河沙數諸佛。又曰：下方世界有師子佛，名聞佛，名光佛，達摩佛，法幢佛，持法佛，如是等恒河沙數諸佛。又曰：上方世界有梵音佛，宿王佛，香上佛，香光佛，大焰肩佛，雜色云云と説く。〇玄同放言卷一上

天網ハ天の圜圖所云疏而不失也。天師天民ハ不爭自得の假稱の一方
外の書は出るゆゆら天と唱るより違つて天を尊と日を敬ふ彼我の分別遠
とくかり瑞まつれども三教その道異れどもその理ハ一致ありんとおれども
去の編ハハゆる比童子問の答あり。談天空語故そ嗚呼あり。問るものも亦嗚呼
なりとを辨しつて侍りゆゆら嗚呼なりとて一編の大意あり。

第四天象

雷魚 雷雞 雷鳥

並ニ異形 雷獸 圖

雷鳥雷獸のより曩は拙著の小説ハ附記をあれども遺漏多かりよめとく
再び攷證をよみ雷魚といふゆゆら故書紀ニ推古紀廿六年云云
是年遣河邊臣關於安藝國令造船至山覓船材便得好
材以名將伐時有人曰霹靂木也。不可伐河邊臣曰其雖
雷神豈逆皇命耶多祭幣帛遣人夫令伐則大雨雷電之
爰河邊臣案劍曰雷神無犯人夫當傷我身而仰待之雖
十餘霹靂不得犯河邊臣雷神即化少魚以挾木枝即取

魚焚之遂修理其船

此の事日本靈異記卷之一は載り。去るれども
臣と小字部 極軽とせ。且雷魚のより。去て史とあり。又源平
盛衰記卷十七は極軽とを載り。その文靈異記におなり。皆非あり。 こそと雷魚といふべは攷

次筆は載る。享和元年辛酉夏五月十日安藝國九日市てみ処ある
盛竈は落く死よりといふ雷獸也。曩はその圖説を閲せよ長一尺四五
寸許四足短毛鱗甲あり。その形粗鯨魚。方書は穿山甲。は似たり。かまがよは
つらなる雷獸とわたり。わたり水族とせらるる近かり。推古紀は雷神小魚は化く
木枝は挾とせといふゆゆら恐らく今古同類あるべし。と果ては去る人よ。彼も安
藝より。此も安藝よ。あは。千百數年を歴く。同物同國は落て死するゆゆら
奇あり。龍ハ雷公を役するといふ説あり。見五雜 組天部。雲ハ山林より起る。又海上より出山
より起る雲ハおのづから山のわらわも海より出る雲ハおのづから波は似たり。さき
山獸のより。雷氣を好む水族あり。只落ると稀なり。人の觀ると多かり。

鳥ハ似シ又酉陽雜俎卷八云京之近山有柴蒿鳥頭有冠如載諸説未詳大若野鷄といへこれも亦らいの鳥ハ似シ只好シ松樹ハ栖セ也否をあらうのミ又正字通亥集鷄字下引臨海異物志云閩越有杉鷄居杉樹下冠頰青亦可食といへこれも亦らいの鳥ハ類ハ然ル栖セとス松と杉と冠頰ハ色ハ異ル然レもも亦らいの鳥ハ穿鑿セバハ得ルべシあられどもも其の物ヲ得ルるハあらいのハ皆推量ノ外ヲ出ス又此方々らいの鳥ハ東涯云越ノ白山ニライノ鳥ト云物アリテ昔ヨリ語リ傳フ其字鷄ノ字ヲ書ットナシ朱冠玄衣足青腹白ク翅ノ先ニ白色ヲ帶フ鵲ノ如シ雌ナルハ雌雉ノ如シ甚其子ヲ愛ス白山ハ北國ニテ究テ高山ナルユエ四時常ニ雪アリ山ノ絶頂ヨリ下廿町バカリ下ニ五葉阪ト云坂アリ萬松環圍コト數十回紹述文集此鳥其間ニ棲宿シ曾他所ヘ行カズ見得ル者アレバ奇瑞トスコノ鳥ヨク火災ヲサクトナシ昔云國ニ小武友梅トイフ

老人家素ヨリ豪富ニテ好事ノ雅人也平生山水ノ癖アリテ天下ノ名山奇水遊歴セズトイフコトナシ常ニ白山ノ神ヲ崇信シ度々山上ニ路ニ休所ノ廬ヲ結ビ往來ノ人ヲヤスラフ親ク彼鳥ヲ目撃シ圖繪シテ云云己上輔軒小録摘要又吉澤好謙信濃地名考下篇云蓼科山ハ栖セ鳥ハ世ニ圖シる鷄之画圖ハ少シノ差あり戴冠立尾モ長ク然レ雄ノ如ク暹羅雞ハ似ク高二尺許黒色ハ白斑あり鳥鷄トいハれル如シ丹頂ノ肉あり雌ハ黄雌鷄ハ似ク胸ノち黒く白斑あり窟穴ニ栖ス松ノ翠を啄むといへト後鳥羽院御集あらう山ノ松ハ木々けハわくらひて也をうふををるらいの鳥ハ解云雷震記中ニ此ノ御製ト家隆卿ノ歌ヲ引クあらいトも出ル所ノ書名ヲ掲げテ夫木鈔二十山ノ部正治二年百首ノ御歌後鳥羽院御製あらう山ノ云同後二位家隆卿ノあらいり又云こノ山立科小鳥ノ夜半ニ鷄鳴ありこノ虚誕あらいとシてみられ月ノ末ニ登山也あらう野ニ一夜あらいテ五十餘町登ルこノ日ヲ霧立ク山中人聲絶々ニ彼鳥六七をえらり

玄同放言卷一上 〇雷鳥 仙鶴堂梓

はくくするは羽さたまりし高く飛去んとをさるるも、數輩東西よりれつ。笠をかざり杖をわたりて逐やせり甚たけくも、去るも聲を、三つおとせしれども、終は石中へ走り入らるるの、さうな雛ひとり獲たり。雌雄石間ありてひねを呼ぶ、その聲虫の鳴くが如し。幽栖の鳥人、驚驚く聲を出さず。鷄鳴ハ妄誕あり。雛の大サ鳩の如し。黄脚高サ五寸許色ハ鷄の如し。目上らほうは丹頂の如し。この説を詳あり。此の鳥ハ蓼科山のまがた、加賀の白山へさるる。飛驒の乗鞍嶽中もありといふ。この他、北國の深山へありと云う猶あり。雷震記云、享保のち、飛驒國、乗鞍嶽、雷鳥ありと聞え、一六有司うけあつとありて、數十羽とさへり。れども、餌飼のさへる故や、多く隕けを餌囊を裂くるる。松實のさあつて、やがて松實を多く飼けども、それより東都へおなり、五六羽は過ども、いづく程なく隕せ、風土の異なる故やといへ。又谷川士清が

和訓栞中の粗らひの鳥をいへる。信濃地名考、雷震記及大和本草等の諸説と異なることなし。和訓栞全部のうち、三ヶ一ツの如く、刊行された本や、傳ふ米鳥のさへる寫本のうちあり。おれども、あつて省たつ。今按はる。古歌よらひの鳥ハ、必松をよめあせり。あて、今ハ雷鳥なるより違はれども、雷よちありとあり、ハ聞え。或ハ來の鳥。或ハ鵜と書らるもあり。鵜字ハ爾雅に、ええと、さうれどもその義よあり。爾雅釋鳥、云、鷹、鵜、鳩、郭璞註曰、鵜當為鵜字之誤耳。左傳作鷄、鳩、鷹、音鶯といへ。刑蒞が疏中、樊光が説を引く。春秋の鷄、鳩、氏と證と。又左傳昭公十七年、鷄鳩氏云云。杜註、鷄、鳩、鶯也。といへる。後ハの、元來字の誤あるハ、鵜といふ鳥ハ、彼處より。正字通、鵜字の下中、只爾雅を引く。この他、本草等を考ふる。出るところをあらはせ。かまハ鵜ハ國俗の合書や。白田を島と。火田を畑と。はくが如し。はくと呼ぶ鳥。さ外中もあり。信天翁ハ水鳥あり。これをあらはせ。大和本草五

水禽部ハクシと云々。海濱の人馬鹿鳥と呼ぶは是なり。和訓栞これに載る。あつとも本書を引く。
 又續字彙補亥鳥部ミライ鸛力賣切音賴鳥名ハクシハ只同音あり。
 その字異あり。又いう所の鳥といふをあるは。信天録あつとものすかん欽雷震記
 云加賀國白山あやま權現の山中ハクシ雷といふ虫あり。形蛙の如し。この虫春ハクシ
 至多多く出る年ハ雷も亦多かり。土人これをハクシと云ふ。打らるるは雷
 と云ふ。彼鳥好きて雷の虫を食へる。よりて雷鳥と名つくといへる。これを雷
 よけといふ義ハクシ就く。土人附會あつともの説あり。同書ハ陳眉公あつともが秘笈此
 中あり。太平清和といふ書を引く。灶神といふ鳥あり。朱冠鳥衣とあれハ
 此方の雷鳥ハクシに似たり。灶神ハ竈神なり。國俗荒神の繪馬ハクシハ鶏を
 画ハクシは灶神の誤ありといへる。灶神鳥も亦この説攷据あり。似れども
 求め過り。竈神の繪馬あり。鶏ハ原らハの鳥を画する。今ハ荒神に
 棚ハクシを。件の繪馬とも。松をハクシせざるは。此の鳥松を好む。

ら鳥ハクシハよく火災あつともを除くといふ。よ鳥の。又雷をハクシする。の。正月の門松を
 藏あつともり。雷鳴あつともの。焚あつともて。おれ。事。彼を師とハクシる。
 あ。灶神鳥ハクシハ求め過り。世ハ彼繪馬を竈神あつともハ。おれ。ハ。實永あつとも以来の
 求め過り。何と。この年。上皇宮の亭子あつともハ。彼鳥の像を画せ
 る。その亭。宝永五年の火災あつともハ。免あつとも。この。ハ東涯あつともの鶴説あつとも
 い。前あつともハ載る。輶軒小録あつともあり。来鳥の事。と異あり。と。畧抄あつともを。紀述
 文集あつとも。越之白山あつとも有鳥。其名曰鶴。字ハ爾雅あつとも朱冠玄衣。
 青趾あつとも白腹。翅端あつとも云云。州豪小武氏友梅あつとも。世虔奉山靈あつとも。締廬
 山腹あつとも。以休あつとも登陟者之勞あつとも。上山者あつとも數矣。竟獲觀之圖あつとも。而傳之。
 曩時あつとも風早中納言實種卿あつとも奏進之。上皇宮あつとも。宣圖其像。
 于亭子あつとも。寶永戊子之災あつとも。亭免あつとも于燬あつとも。屬者友梅あつとも奉頌あつとも。卿令孫
 實積朝臣あつとも。辱あつとも以聖製題其上あつとも。傾屬予記之云あつとも。享保十四年。
 己酉四月。

玄同放言卷一上 ○雷鳥

仙鶴堂梓

同集卷十二 題鵝圖 越山有鳥其名曰鵝 潛迹深松 棲彼崔嵬 朱冠玄衣 雙目徘徊 圖而傳之 曰能避災城霽寰公懸 荒神の繪馬とて 賣出せり かくて年々 人遊ぶ 其原を得 於 於て 今ハ 鶏を圖はり 然れ 虎を画たり 狗と 類あり 又按 山海經卷之二 云 黃山之西 二百里 曰翠山 其山云云 其鳥多鵝 其狀如 鵝 赤黑 而兩首 四足 可以禦火今按 鵝音壘 與 備 檢正字 通中 集 鵝字 下云 俗鵝字 說文 作鵝 といふより あり 鵝と雷と 聲相近 翠ハ和訓 民騰 璘あり 翠山を讀て 松山とも 且その圖を觀れば 經と異 小く 尋常 有る 山鶏の如し 鵝の俗字 鵝あり 然れ 土の 然れ 鳥は 傳會 しく 雷鳥とも 書 然れ 火を 禦ぐと あり べし

又唐山中 漢の時 画工 圖せり といふ 雷公の形ハ 王充論衡 雷虛篇二十 三葉 見 晉の扶風の楊道和 搏殺せり といふ 雷獸ハ 搜神記 卷十二 第六 出 あり あり 故事ハ 前輩 多く 引用 せり 人の あり あり 色ハ 贅せり 雷獸ハ 今も 目撃 せり あり あり 状 小 狗 類 しく 灰色 之 頭 長 く 喙 半 黒 一 尾ハ 狐の如く 利爪 就鳥の如し といふ 雷震記 圖 あり あり 信濃 地名 考 説 あり あり 大抵 相同 一 又一説 首尾ハ 獺 似 しく 狀 鼯鼠の如く 尾 共 長 三 尺 二 過 び 全體 離 狐の如し といふ 種類 一 同 あり あり 越後 名寄卷一 天象 參補 亦云 安永 中 雷 隕 于 村松 城之 士家 而 獲 獸 大 如 猫 其形 亦 畧 相 似 矣 其毛 灰色 而 有 光 日 中 之 後 帶 黃 赤 色 如 金 腹 毛 逆 生 毛 未 皆 有 岐 天 晴 則 終 日 垂 首 如 眠 陰 暗 風 雨 之 日 則 有 可 恐 之 勢 矣 此 獸 打 傷 足 而 不 能 升 騰 是 以 被 獲 焉 瘥 之 後 士 人 故 之 矣 按 益

めて僕と友垣結ぶや久しくありぬ渠が總角のとき祖父の云云といひまわく
圖よりとふれど虚實の定りありむといへも牧之の老實人ありて云ふこと
有りかれけし信かきとるりなむとと
因よるは騰寫して兒曹の觀を充る
のしやこれ物よにありともその形をこれ
かんや六足三尾の復つてくもあはれか

香岩畫


雷獸 畫圖



此圖與一本寫
生四足之物比
校乃祛虚撈實
使興繼復画之

余あまの画圖をえて更に思ふありこそ

唐の李肇が所云雷州の雷公と全類あるべし

唐國史補篇下云雷州多雷春夏無日無之雷公秋冬則伏
地中人取而食之形類彘といへるが雷獸の首猪に似たり
世にこれやといふも 蠡海集 氣候 亦云風雷在天有聲而無



形故假乾位戌亥肖屬以配之是以風伯首像犬雷公首
 像豕雨為坎坎中男也雨師像士子電雷光也對震者巽
 巽長女也電母像婦人古之鹵簿四神旗皆繪畫也といへり
 五行の理を推して宋儒の癖に謝肇淛のいふごとくこれを笑へるも
 雷公の首を豕に像ることを大に據あつて画者のそのととのをきべからば
 今やも右あり画圖を唐國史補より考へて聊あは取るとあり但奇を
 好むの譏を免れんと死のこいひでよみ雷火の陰火といふも凡火をも亦
 陰火といふもあり清逸田叟小説云太陽為陽凡火為陰故
 太陽出而火燄無光水澤之氣亦消滅ことも亦一説あり



玄同放言卷之一上終

